

『ABCの本』～英語の音を表す文字があることに気づき始めた子どもたちのために～

【制作意図】

1. Alphabet 26 文字の名称とその発音の確認: デジタル版では、その発音の音源がある
2. 大文字と小文字の形の確認: 書写
3. アルファベット順に、文字を正しく書くことを、実線だけでなく、点線で表示し、なぞり書きで確認する
4. 26 の文字が、どのように使われて、英語の単語を現しているかに 4 つずつ例を挙げて気づかせる
 - ・単語の綴りには、ルールがあることにも気づかせる (音素と綴りの関係)
 - ・英語の音韻に気づかせることで、文字と音の関係を理解させ、読もうとする意識付けにつなげる
 - ・子どもが既に蓄えていて、発音できる単語を用いて、その綴りを見せていく
 - 文字が頭音の場合だけでなく、中ほどで、或いは最後に使われている場合も意図して選んでいる
 - ・同じ文字が、異なる音を現すことがあることにも気づかせる 例: H, h; hat, house, ship, three
 - ・発音されなくても、綴りにはなくてはならない文字にも気づかせる 例: I, i; island, night, knife, bird
5. 文字の綴りのルールに慣れ親しむことにより、単語を読もうとする力をつけ、
英文を目にした時に、単語の音を類推して、口頭で表現していた文を音読しようとする力を養う

【久埜の指導手順】

1. まず、全員に 1 冊ずつ配布。名前を日本語で書かせる
(英語で書きたがっても、まず日本語。英語を書きたい人は、書き添えてもいい)
なぜ、日本語で名前? クラス全員が読める。置き忘れたりしていても、本人に戻るように。
2. パラパラとページを見て、何をするための冊子か、想像させる。
3. 英語を書く練習ができる本みたいだね、と誘って、
最初のページの Alphabet26 文字、大文字をみながら、正しい発音で、しっかり読む。
小文字も読めるかな? (同じ順序ですから、これは愚問ともいえるのですが、
子どもはつられて、読めると思う、という表情。)
じゃあ、と小文字を読んでみよう、と言って、しっかり発音しながら、読み上げる。
4. 書きたい? と聞いて見る。早速、新しいところにうまく書けるか不安…という表情の子もいるが、
殆どの子どもは書きたい、という。
5. 元気よく、そうだね! 書いてみよう! と言って、
今読んだ Alphabet 26 文字の大文字をまず書いてみよう、と誘って、
大文字 A のすぐ隣に A と書きなさい、と指示。
A と B の間に 1 字だけのスペースがあるので、A と書かせる。
もう一つ書こうか、と言って、じゃあ B の隣りに B と書こう、と誘導。
書けた! と成功を喜ぶこと、何だ、簡単! と言い出す子がいて、
そお? 簡単? じゃあ、出来るところまで書いてごらん、という。
勿論、お手本の右に 1 字だけ書くので、作業は簡単に終わる。
すごいね! と驚いて見せて、時間が許せば、小文字も、次の文字との間に書かせます。
4 本線の上、とか下とか、考えずに隣に書けば正しい位置に書いているので、小文字も完了!
もっと! という顔を確かめて、次のページに進む。(大変そうな表情の子が 2, 3 人でもいれば、
ここで終了して、次の時間にもっとやれる! という期待を持たせてもいい)、

6. いよいよ A の見開きページ。

What is this? 4つのイラストを指さしながら、A table, a banana, a cap, an acorn. と単語を確認、じゃあ、先ず、この本の絵を全部読んでいこう(絵を読む、とは日本語ではおかしいかもしれませんが、お許しください)と言って左側の4つの絵を全部読み上げます。

100%に近く、子どもが持っている語彙ですので、こちらの発音がしっかりしていれば、子どもも聞き取って、復唱しながらついてきます。

最後の Z のページにあるニュージーランドの地図を指して、New Zealand! 読めたね、

一つの文字に4つずつ、全部で? いくつかな?という前に、掛け算の早い子が104!

Yes, one hundred and four!みんな100以上も英語で言えるコトバがあるんだね、と驚いてみせますが、いつもWORD BOOK その他のやり取りでもっと別の単語も使いまわしているにもかかわらず、改めて、自分はすごいんだ!と思い込みます。

7. いつ書かせてくれるの?という顔を、じゃあ、文字が一杯あるから、読んでから書こう、と誘います。

読める、という気分は悪くないので、Aのページに戻って、ついてこようとします。

私は、更に音韻をしっかり発音しながら、-corn, c-p, t-ble, b-n-n!

え?そんなの、ヘンだよ、という顔を無視して、Next page (Bの見開きページ), -at, -all, ra--it, -lue.

そろそろ強引過ぎる!という顔が増えますが

Now, next!とあって、-up, -orn, bla-k, -rabと言い終わるころに、「気持ちわりー!」と言い出します。

OK! Let's go back to page A.

8. 子どもたちはホッとして、Aに戻ります。

そこで、ページの上の、大文字と小文字を書きなさい、と指示。5.で書いているように、最初のページで26文字を既に書いていますから、迷わず、書きます。

適当のところまで、書いたものを読んでみよう、と誘い、1人の子の「ABCの本」を見ながら、クラス全員で、A!の発音をしっかり聞かせながら、それぞれが自分で書いたすべてのAとaを読み上げます。

書いた文字の数によっては早く終わる子も、まだ2つ3つ読み続ける子もいます。

その間に、文字の形のバランスなどを、机間巡視して点検します。

9. さあ、絵の下の単語のところに a を書き入れてご覧、と言います。みんな一生懸命、前のめりです。

10. 書き終わったところで、さあ、読んでみよう!と誘います。自分の書いたものを読むので、誇らしげです。

今度はaが入っているのですから、acorn, cap, table, ...と声を揃えて読み進めます。ところが...

これは不思議なのですが、クラスに1人は、bananaの最後のaを書いてない子がいます。

それを子どもが書いている間に素早く見つけておいて、「上手だね、先生に読ませて!」と頼んで、

その子の「ABCの本」を手にとって、acorn, cap, table, banan!と読み上げると、

え?バナナでしょ?という顔で、私を見上げます、「でもbananって書いてあるわよ」といってニッコリ、指で指示をして、aを書かせます。

他にも最後のaを書き忘れていた子が、あわてて書き加えています。

この話をすると、「ABCの本」を使ってくださっている他の学校の先生方が、国公立小を問わず、皆さん、「ある、ある、ある!!!」とって経験談をお話しくさいます。

これが、私の『ABCの本』を使い始める時の楽しみ、です。

ここまでの手順をしっかりやると、次の文字は来週また一緒にやりましょう、と言っても、書き進める子がいます。

新しい文字以外は点線をなぞりながら書くようになっていますから、Bのページでは、bだけが空欄になっていて、aは点線をなぞればよい、という仕掛けなので、その後の25文字は、子どもに任せておいても間違えることはなく、自習で仕上げることができます。

もう一つ、後日談があります。次の週に、「また一緒にやろうね」と皆で約束をしたのに、禁を破って、全部やっちゃった!という子がいて、お昼の休み時間に見せてもらいました。きれいに力を入れてZまで書いてあるのに、どうしたことかTのページのhelicopterの+だけが記入漏れです。私がtent, tomato, helicop-er, matchと読み上げてから、惜しいねえ、+をすぐに書きなさい、というと、もうそれでいい、と言って、友だちとの遊びに夢中です。こちらも気前よく許して、その代わりに、ヘリコプターは、いつもヘリコパーっていうのよ、と言ったらOK!の返事。

数日後のこと、WORD BOOKを使ってページ探して楽しんでいる時に、その子がヒントを出すことになり、いくつか続けてヒントを出している時に、I can see a red helicopter!と言ったのです。私が聞き逃さずに、NOW, you sit down, and write the 't'! 事情を知っているクラスメートは大笑い。こんなことで、音素と文字の関係を教えることができました。

【見開きページ・右側の使い方】

『ABCの本』の左側は、上で書いたように、子どもが文字を書く作業で埋められていきます。では、右側の大きな空白は、何のために設けたのか。

このページの上の方に、左側で書いた文字で始まる単語のイラストが2つか3つ並んでいます。例えば、pのページにはpenguin, pianoと2つ、rのページではrabbit, ribbon, ringと3つ並んでいます。その下のスペースに、子どもたちがその文字で始まる言葉を集めて、その絵を描いてくるように指示します。bのページには、book, butter, bread, bed, basket, baby, blue, brown, boy, bench, bowl, とたくさん並びます。子どもの身の回りにある、カタカナ語から集めてきますが、たまには、新聞の折り込み広告で調べたりして集めますので、車の名前や、お母さんの化粧品の名前の絵も混ざっていて、私の知らないものがあり、判断に苦しむこともあります。それが私には楽しいので、この“コトバ集め”の作業もやめられません。

この作業で、子どもたちがK, Q, Xなどでコトバが見つからない!と訴えてきます。その時に、教室においてある英和大辞典を見せて、Sのページ数とQのページ数を比べてみせると、「そうだよ!国語の辞書でも、多い字と少ない字があるよね!」と気づいてくれます。それはどの字?と質問をすると授業は楽しく横道へ!

また、大好きなレーズンはLかRか、どっちなの? カレーはKじゃないの? カーテンは? クッションは? と質問が続きます。不思議とチョコレートとチーズは間違えず、質問もなくCのページに収まります。いつも自分で包装を解いて食べているのだな、と推理します。英語の音を聞き分けられると、文字への関心が募り、どの文字で綴られているかを発見していくようになります。指導を始めて身近な語彙が増えたころ、この作業を楽しみます。

この、自分で英語と思える単語に気づいて、それをどの文字に分類するか、という授業は5分くらいを当てていましたが、「もうコトバ集めしなくていいの?」と訊いてくるくらいお気に入りの作業でした。

この作業の間に、子どもたちは、文字と音素の関係を心の中で繰り返し考え続けていることになります。子どもたちが英語と触れあう授業が教科となり、「読むこと」で、何ができるのだろう、と考えさせられますが、こうして単語と文字との関係に気づかせることで、フォニックスのルールを自分で発見し、次のステップである英文の「読み取り」につなげていくことができるようになります。(2021年11月 久埜 百合)